

木簡第一号発見のころ

田 中 琢

「タクサン、ナンカ字イカイタルデ」寺田崇憲氏(当時奈文研技術補佐員、現大阪市徳蔵寺住職)の声にわたしはふりむいた。昭和三十六年一月二四日午後二時ごろ、ちらつく小雪が消えるバケツの泥水、崇憲氏の手にした木片(平城木簡番号四)には、たしかに文字がみえた。平城宮跡、奈良市佐紀中町における第五次調査現場のことである。

昭和三四年七月に再開された奈良国立文化財研究所による本格的な平城宮跡の発掘調査は、宮跡中央部北寄り、西大寺から法華寺にいたる通称一条通りの北側の地域と「第二次内裏」地域の二か所を中心にして実施中であつた。木簡第一号が発見された第五次調査は北寄りの地域の調査としては第三回目。それまでの二回の調査で、整然とならんで検出され、計画的に造営されたことを思わせる掘立柱建物、数回にわたって建てかえられている事実が明らかにされており、柱穴の重複関係から造営期の復元を試みる資料も得られていた。また、この地域と南接する「第一次内裏」とは、溝などで間をさえぎられ、朝堂院や内裏とは機能を異にする部分であるとしたいに認識されはじめていた。しかし、それまでに調査が完了していたのは、宮跡全域で約〇・七ヘクタール。発掘作業員は多くて一日四〇人、木簡検出のころは二〇人程度。日当は五五〇円。よう

やくベルトコンベアが活躍はじめたが、まだトロッコも併用。現在の平城宮跡の調査ずみ面積二五ヘクタール、作業員約百人、平均日当五千円という数字をあげると、昔だなの感がつよい。

昭和三五年一月に始まつた第五次調査は、一月一二日に藤田亮作所長急逝という当時の所員にとつて衝撃的なできごとであつたが、ほぼ年内に遺構検出を完了していた。この調査では、造営面とでも呼ぶべきいくつかの旧地表面とそれぞれにともなう遺構の存在を確認していた。そのなかにはいくつかの土坑があつた。不整形深淺さまざまの土坑では、土器をはじめ多量の遺物が廃棄された状況で発見されることがそれまでの調査で判明しており、考古担当調査員はこの種土坑の発掘には大いに成果を期待していた。そのひとつのちにSK二一九と呼んだ土坑は、土層観察用に残した東西のアゼで、北南に分断されていた。当時から気が長くなかつた坪井清足氏は、年末発掘中止直前に、わたしを督励し、この土坑の南半部にスコップをいれさせ、土器の埋没を確認していた。この土器は、保存状況が良好であるうえに、過去二年間の調査の出土品にはない、時代的にさかのぼるかと思える特徴がうかがえた。坪井氏はいった「船橋に似てるぞ」。歴史時代遺物の編年と細分に努めていたわれわれには、数年前大阪府柏原市船橋遺跡で発掘、報告されていたものに匹敵する土器が平城宮跡において検出できる予想は、この土坑の発掘結果に大きな期待をいだかせるものであつた。

正月休みを置いて一月一日から再開した調査は、写真撮影、遺

構実測、そして埋めもとしと進み、併行して土坑の掘りさげを開始した。一月二四日前後は同月二七日開催予定の特別史跡平城宮跡調査委員会の準備のため、調査員のほとんどは奈良市春日野町の研究所へ出勤。現場にいたのは、研究補佐員のわたしと崇憲氏の二名だけであった。土坑SK二一九からはすでに墨書土器や完形の土器など、予想にたがわぬ出土品があり、現場ではバケツと筆、ブラシ等を用意し、出土品を粗洗いし、確認しながら発掘を進めていた。といっても、木片に文字のある可能性を意識していたわけではない。崇憲氏のこまやかな注意力が第一号の木簡を発見させたのだった。

第一号木簡を泥水のなかで確認したとき、おそらく榎本杜人氏（当時歴史研究室長）などの先輩からうかがっていた楽浪古墓出土の木製品の保存の苦労話やかつてみた中国長沙古墓出土の乾からびた木製品の現状写真などが意識のそこにあっただけであらう、ただちに写真撮影を、記録をと気があせた。だが、前年九月に幼稚園舎を移築して開設した現場事務所にはその用意はまだない。春日野で会議中の調査員諸氏に電話連絡後、水を含ませたガーゼと綿にくるんだ木簡をポリ袋に納め、作業員に託し、春日野までほぼ六キロの道を自転車で移送した。しかし、春日野へは現場のあせりにも近い気持は伝わらない。もはや夕刻。第一号木簡はそのまま。そのためかどうか、数日後に現場事務所へもどったこの木簡はほとんど判読不能にまで黒変した状況を呈していた。現場にいた二人には痛恨事だった（ただし、十数年のち、EDTAなる新薬品と真空冷凍乾燥保存法のおかげ

で、この木簡もとの色調をとりもどし、記載内容も習書と判明）。

その後同日夕刻近くに一点。さらに二七日の十四点をピークに二月一日まで木簡の出土は断続する。二七日にはじめて削屑に文字のあることを発見したのも崇憲氏。その一点「大豆二升直廿二文」木簡（平城木簡番号二五）はササの葉に書いたものとの説が流れ、新聞に報道されたことのあったのもなつかしい。現場事務所では、渡辺衆芳老（当時写真担当非常勤研究補佐職員）と杉本敏昭氏（当時運転担当職員現西大寺フォト店主）によって写真撮影も開始された。現在行なっているような現寸大のモノクロ撮影と併行して、赤外線写真も計画したが、急遽入手した医療用赤外線ランプとたなざらしの赤外フィルムを使って、暗室外で撮影した写真では、結局大した効果なし。田中稔氏が現場事務所で釈読を開始したのは二六日ごろ。わたしが実測するかわらで、氏が野紙に文字を見とり写ししていたことを思いだす。この記録法はその後踏襲される。最初に現場を訪れた古代史家は岸俊男氏で、赤松俊秀氏とともに土坑のそばに立ち、出土したばかりの木簡の釈読について話されていた。この日も雪がちらついていたから、二六日だっただろう。

希望の年紀銘木簡は、一月二七日出土の「山梨雜役胡桃子」木簡（平城木簡番号二〇）が第一号。「これで土器の年代がきまる」天平宝字六年の年紀はわたしを狂喜させた。食料品関係の付札類の多いことを注意しはじめていた最後のころ、一月三一日に「寺請」木簡（平城木簡番号一）が出土し、毎日のように現場事務所を訪れていた岸

俊男氏から、数日のちに、寺が法華寺で、記載内容は高野天皇に係ありとの教示をうける。しだいに調査関係者の間で、この地域にあったのが食料担当官衙、大膳職か内膳司かといった考えがまとまっていく。こうして二月一日木簡を出した土坑の発掘は終わった。

最近、木簡という呼称について、簡か牘かといった議論を見聞することがある。当時の関係者、とくに考古担当調査員には、この種の遺物を呼称する用語として、「木簡」はすでに学界で確定しているものであって、それをどう呼ぶか議論する必要はまったく感じていなかったことを付記しておく。

出土した木簡は、これも急遽とりよせた写真用バットのなかに脱脂綿でくるんで、ホルマリン水にひたし、空気から遮断した。木簡の保存は、この強烈なホルマリン臭も加わって、終始頭痛のたねだった。春になり、暖くなる。カビ、腐敗、乾燥。あるいは、ホルマリン水の中で、脱脂綿とこすれて、文字は消えないか。そこで採用したのが、写真用バットのなかにホルマリン入りのカンテンを流し、それに木簡を封じこめる非常手段だった。それを収納保存するために、四月に電気冷蔵庫を購入。この冷蔵庫は木簡保存はもちろん、調査事務所にとまりこんでいた調査員らの生活にいかに関与したか。ちなみに、飛鳥地方寺院跡の調査研究に対してうけた昭和三五年度の建築学会賞の賞金によって、電気洗濯機を、ひきつづいて購入している。昭和三六年は、木簡発見という大事件だけでなく、現場事務所の近代化でも画期となった年だった。

最初の木簡の発見は、われわれ関係者には異常な寒さの記憶と結びついている。今回奈良気象台に問合わせてみたが、やはり昭和三十六年一月は一〇年に一度ぐらいの寒さだったという。このなかで、木簡をはじめ、脆弱化した遺物をこわさぬよう泥土のなかを素手で掘り、かたわらの古バケツのなかでわかし湯に手をひたして暖をとった経験もなつかしいものとなった。この寒さのなかで掘りだした四一点の木簡は、平城宮跡の発掘調査はもちろん、古代史学にもさまざまな影響していく。あるいは、翌三七年初頭に突発した近鉄車庫建設計画にはじまる平城宮跡の保存問題も、前年のこの木簡の発見がなかったならば、おそらく相当ちがった展開になったであろう。そのころ、何度となく平城宮跡の調査成果を紹介する機会があったが、この四一点の木簡がどれほどその理解を容易にし、平城宮の具体像を生々としたものにくれたことか。

木簡発見以前の歴史考古学は、考古資料と文献史料という直接関係なく遺存された二種類の史料の間の格闘にとどまっていた。木簡の発見は、文字による史料が遺跡遺物といった考古資料の一部となったことであり、考古資料と文献史料の間隙を埋めることでもあった。歴史考古学は新しくその個々の資料の一部として文献史料を加え、考古学の方法論で文献史料にたちむかうことが可能になった。歴史考古学の先史時代は終わり、歴史考古学の歴史時代はこのときから始まった。二〇年たつたいま、考古学を学ぶわたしはこのような感慨をいだいている。